

文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間 会報 No.82 2018年7月1日発行
川崎市幸区古市場 2-109 京浜協同劇団内 TEL 044-511-4951 郵便振替 00250-3-18369
ホームページ：http://www.keihinkyoudougekidan.com/bunkano-nakama/

雑木林を どこまで豊かにできるか ぼくは音楽を通して そのことをやっているのかもしれない

安達さんの「50 数年に亘る仕事」の全容を知りたい 京浜協同劇団 和田 庸子

「どんな本ができるのかすごく楽しみです」「がんばって!」「期待してるヨ」北海道から屋久島まで、全国各地から熱い視線と声援が届いています。さらに「出版記念会はウチでやって」「記念コンサートを準備したい」とのお申し出も東西からチラホラ。「ヘンな本にしたら承知しネエからな」と、出版元となる株高文研の社長に伝えた人もあるとか……ありがたいことです。中身をつくっているのは刊行委員会なんですけど。

なぜこんなに待たれているのか?“刊行ニュース roots”でお伝えしている通り、その秘密はなんと言っても、人間・安達元彦その人にある。

安達さんの「50 数年に亘る仕事」の全容を知りたい、それを本にまとめたいと思ったのが今回の「本づくり」の第一の理由でした。

安達さんが音楽雑誌や労音機関誌、コンサートのパンフレット、レッスン・ノートなどに寄稿してこられた、かなり膨大な量の文章を読み、選択していく作業のなかで、私たちが知らなかった安達さんをたくさん発見しました。それは驚きと感動の連続でした。例えば、40 年前の論文「遠まわりのベートーヴェン論」はタイトルからは想像できない内容です。「日本国憲法はアメリカのおしつけではなく、『民衆自身』が創り上げたものだ」という論点が詳しく語られていたり、ピアニスト・作曲家の三宅榛名さんの「安達さんと言えば、『原水爆禁止』や『ベトナム戦争反対』のピラ

を書いている姿がすぐ浮かんでくる」という文章も見つかりました。お電話で文章掲載をお願いした折「ねえ、これは載せられる?」と別の安達さんの文章も送って下さいました(三宅榛名さんは作家の柴田翔さんの奥様)。また、音楽之友社「教育音楽」誌の女性インタビュアーに1989年の記事転載をお願いしたところ「私、安達さんを尊敬しています。記事はどのように変えて頂いてもかまいません。お任せします」と快諾して下さいました。とても嬉しかったです。(この記事のタイトルが本文章の冒頭文です)他にも、映画「ヒロシマの証人」(音楽・安達元彦)を渋谷の共同映画社の試写室まで観に行ったり、若き安達さんを撮影した写真家の娘さんにも出会いました。

安達さんを囲んでの「根掘り葉掘り」座談会、古澤潤さん・鈴木たか子さんとの対談は累計27時間におよび、文字起こし作業を秋山ちづるさんや板垣けゑさんが協力してくれました。私たちはこの一年、安達さんのすべてをこの本に注ぎこむことに夢中で過ごしてきたのです。

この本は音楽についてだけでなく、生きることそのものを励ましてくれるでしょう。

刊行は秋です。どうぞ、楽しみにお待ちくださいませ。

(刊行委員会=代表 和田庸子 白井由美子 塩田儀夫 岡本明男 石井彰二)

自分の心と音が繋がった瞬間の喜び

秋山 ちづる

去る5月12日(土)、武蔵野スイングホールにて、秋山ちづるピアノコンサート『ゆずり葉のうた～あなたから私へ 私からあなたへ～』(主催:ぞうきばやし ゲスト:安達元彦氏)を行いました。

当日は、私の予想をはるかに上回るたくさんのお客様がお見えになり、そのお客様に支えられて、最後まで「今、精いっぱい」の演奏をすることができました。どうもありがとうございました!

約15年前、ドイツ留学から帰国した私は、「心と音色が乖離した状態」の自分のピアノに苦痛を感じ、「いっそやめてしまえば楽になるはず」と、1年間ほどピアノから逃げ出した時期がありました。しかし、やめたら楽になるどころかますます苦しくなる一方。どうしたらよいか分からないまま、また徐々にピアノに向かうようになりました。

そんな途方に暮れた数年を過ごす中で、安達元彦さんやたつの素子さんとの出会いに恵まれました。お二人の、いわゆる音楽界や世間の常識にとらわれない、むしろ、常識を疑い本質を求めるような音楽活動に、半分無意識のうちに惹かれ、関わらせて頂くようになりました。

たつのさんからは、「歌え」だの「踊れ」だの、当時の私からすれば想定外のことをよく求められ、最初は戸惑ったり不本意だったりしながらも、私なりに応えていく時がたくさんありました。しかしそれが結局は、私の窮屈に凝り固まった頭や心に少しずつ柔軟さと創造力を取り戻す役割を果たしてきたのだと、あとから認識するようになりました。

また、安達さん作曲のピアノ曲『MIN - YO』との出会いも、自分が追い求める音色の方向性を、大きく転換することへと繋がってきました。

そうした10年を経ての今回のコンサートでした。久しぶりに、私のソロ演奏を中心に据え、「10年前とはちがうコンサートにしたい!」と思いました。「でも、どうやって?」。漠然とした思いや欲求はあっても、具体的なことまではすぐに思いつかず……。安達さんに相談にのって頂き、その中から生まれてきたプログラム構成でした。さて果たして、お客様はどのように受け止めてくださるのだろうか……。不安半分・楽しみ半分、で迎えた本番でした。



そして今、感慨深い気持ちでコンサートをふり返っています。「悩みもがいた10年」の全てが、自分の血肉となり、また音となって、あらゆる面において表れてきたコンサートだったと思っています。決して「完璧」という意味ではありません。模索は続きます。でも、自分の心と音が繋がった瞬間の、言いようのない喜びを胸に、これからは悩むことももがくことも恐れずに、前に進んでいきたいと思っています。演奏の機会も少しずつ増やしていきたいと思っていますので、お声がけ頂けましたら幸いです。未だ発展途上ではありますが、今後とも、お付き合いと応援を、どうぞよろしくお願いいたします。

会報編集部から 前号(No.81)でご紹介した文化の仲間会員の秋山ちづるさんのコンサートが、同じ会員の安達元彦さんをゲストに行われましたので、感想をお寄せいただきました。



劇団員による劇団員紹介 第2回——城谷護さんによる鬼丸ゆり（本名＝石倉邦子）さん紹介

友だちをいっぱい持つ女優

京浜協同劇団 城谷 護



こんなにも友達づくりのうまい人を私はあまり知りません。劇団のお客さんはもちろんですが、それ以外にもいろんな友達があります。

彼女に「自分の好きなところは？」と聞いたことがあります。彼女は答えました。「人を好きになることです」。なるほどとうなずけました。友達が多い秘訣はそれなのでしょう。

私は、劇団の稽古が終わってから、よく飲み立ちに立ち寄る所があります。その時、よく彼女を誘います。なぜかほっとするからです。彼女は、話すのが大好きです。そしてよく聞いてくれます。

ところで、彼女を知ったのは今から48年前、彼女が劇団に入ってきた1970年です。第1次稽古場を建設した年です。そのころ、劇団は半年ごとに研究生を募集し、新人を育成していたのですが、彼女は第17期生として入団してきました。

岩手の短大を出て、川崎市の職員試験に合格、念願の保母さんとなり、劇団活動も始めたのです。以来、ほとんどの公演に出演してきましたが、中でも印象深い作品は、『金冠のイエス』（1976、1977、1980年）、『ある馬の物語』（1985年）、『龍の子太郎』（1991年）、『郡上の立百姓』（1993年）などです。『金冠のイエス』では売られてゆく娘の切なさを見事に歌いました。今でも耳に残っています。『郡上の立百姓』では一揆の若手リーダー一定次郎の妻の役をやりきり、観客に感銘を与えました。彼女の清純な演技に魅了されたものです。

ところが、1994年、彼女は交通事故の被害者となり、1か月間記憶を失ってしまいます。44歳の時でした。



カルテには、頭蓋骨低骨折、くも膜下出血、気脳症、頸髄損傷などの病名が書かれ、顔と全身を包帯で縛られ、見舞いに行っても誰かわからないくらいでした。

医者には「手も足も動かない、片目は失明、一生寝たきりになるかもしれない」との宣告を受けたのです。

しかし、意識がもどった彼女を多くの友達が次から次へと見舞いに来てくれました。特に保育園の仲間たちが150万円にも上る激励カンパを集めて持ってきてくれたのです。夫の石倉貫次さん、息子の道行君、竜馬君が献身的に支えてくれたことは言うまでもありません。

彼女のすごいところはそれからです。そういう友達の応援を力にして、立ち直っていくのです。

「一度も経験したことのない中途障害者の役をもらったと思えばいい」と自分を奮い立たせたのです。リスクを伴う目の手術も、耳の手術も、「どうしますか？」と医師に問われ、「やってください！」と頼んだのです。片方の耳は障害が残りはしましたが、耳も目も手術は成功したのです。しかし、いいことだけではありません。自分の思い通りに動いてくれない手足に「私が生きていても迷惑をかけるだけ。あの時死んでしまえばよかった」などと自分を苦しめることだったそうです。

彼女はその後、七沢の更生ホームで1年3か月、リハビリに取り組み、事故から3年後には復職、小杉の障害者更生相談所で勤務することができたのです。そして劇団活動にも復帰、2001年、51歳で7年ぶりに舞台に立つことができたのです。藤田傳作、内田勉演出の『とりあえずの死』という舞台です。敗戦で中国に取り残された養老院の女性たちを描いた作品です。彼女は車いすに乗って舞台に立ち、大きな拍手をもらったのです。

私は講演型の腹話術をするとき、彼女のことをよく話します。すると「感動した」、「私も頑張らなくっちゃと思った」という感想をもらいます。彼女の生き方は多くの人を励ましているのです。

彼女は事故から3年後に小冊子を発行しました。題して「私は役者—中途障害者の旅立ち—」。その中で彼女は言い切ります。「私は役者。難しい役だけど、諦めずに舞台の幕が下りるその瞬間まで、この役を立派に演じ続けたいと思います。」

連載 「京浜協同劇団」と私——第5回

演劇との出会い

岡田 京子

●演劇との出会いは、高校に入った筑豊の飯塚市でした。この地に至るまで、満州と日本を二度行き来し、疎開した佐賀で終戦を迎え、父は復員した久留米で開業して失敗し、行き場に困って、その頃最後の繁栄を誇っていた筑豊炭鉱の中の小さなヤマ（炭鉱）の診療所の医師となって、残りの生涯を送りました。

私はここで入った高校で初めて見た演劇が、地方公演をしていた前進座の『ベニスの商人』でした。河原崎長十郎のシャイロック・瀬川菊之丞のアントニオ・河原崎静枝のポーシャで、ちょっと難しかったけれど、幕間に流れる簡素な音楽があって、そちらの方に心が動きました。こんな風にして場をつなぐんだと感じたのを思い出します。

●その頃初めて日本に入ってきたソビエトの映画「シベリア物語」を見て、すっかりロシア民謡に魅せられ、それを覚えたかったのですが、当時それを知っているのは音楽ではなくて、演劇をやっている人たちであることがわかったと、私は学校をやめて市の自立劇団に入ったのです。私はそれまで7回も転校して勉強が

嫌いだったし、大学受験の準備で明け暮れるような学校に何の未練もありませんでした。

●私はそこで、ロシア民謡も覚えられただけではなく、飯塚公会堂で行われた8月15日の平和祭に、劇団と一緒に出演もすることになりました。小幡欣治氏の「蟻部隊」という作品で、私は苛酷な労働で肺を病む働き蟻の一匹でしたが、ものの5分もかからないうちに、武装警官隊によって上演中止となりました。「政令30号違反」即ち「占領政策違反」で、50人以上の集会が禁じられていたのです。みんなで楽屋で悔し泣きをしましたが、これが私の最初で最後の演劇の出演となりました。

●それにしても私の芝居はすごく下手だったんだと思いますが、その後、劇団のみんなに「あんたは芝居をやるよりも音楽をやった方が良い」と言われて、東京に行くこととなります。そして入った中央合唱団で新しい友人達に会い、師匠の原太郎氏にも出会って「私の大学」となった民謡の宝庫・秋田の地で、活躍していた「わらび座」に入れてもらうのです。

第38回 かわさき演劇まつり 宮沢賢治の不思議な童話宇宙

注文の多い“どんぐりと山猫”と料理店

日程 7月14日（土）11時・15時／15日（日）11時・15時

会場 多摩市民館ホール

原作 宮沢賢治（「注文の多い料理店」「どんぐりと山猫」「氷河鼠の毛皮」より）

脚本 丸尾聡／演出 大西弘記（劇団TOKYOハンバーグ主宰）

出演 公募の市民・京浜協同劇団・劇団ラニョミリ・劇団企てプロジェクト

入場料 おとな2000円 こども1000円

問合せ かわさき演劇まつり実行委員会（京浜協同劇団内）TEL 044-511-4951 Fax 044-533-6694

メール：matsuri_engeki@yahoo.co.jp

主催 かわさき演劇まつり実行委員会・川崎市文化財団 共催 川崎市・川崎市教育委員会

没後
85年
宮沢
賢治

『注文の多い“どんぐりと山猫”と料理店』

今回はじめて招いた演出・大西弘記氏のリードで

京浜協同劇団 河村 はじめ

「かわさき演劇まつり」は実に 40 年数年にわたり……とこれまで幾度となく紹介してきました。そこには筆者の知らない領域が広がっており、想像力を頼りに「歴史」としての演劇まつりをつかまえようとするだけです。多様な形を懐に擁する演劇という芸術じたい、人間の歴史と密接に繋がっている事をヨーロッパの演劇事情（それほど詳しくありませんが）に感じたり、わが日本のわずか 100 余年の（近代）演劇史にもあった大きな変化の中に演劇が時代とともにある事を思わせられたりすると、演劇が結び合う「現在」と、これを「続ける事」との関係を考えずにおれません。何を目指して演劇を作り続けるのか、という難しい問いは脇へ置くとして、演劇まつりもある変化を刻み、今回もその変化の一過程として後に理解する事だろうと、何となくですが予感しながら取り組んできたように思います。

堅苦しい前置きはこのへんにして、間もなく本番を迎えようとする第 38 回かわさき演劇まつり『注文の多い“どんぐりと山猫”と料理店』を紹介します。今回は「初めて」新作戯曲に挑みます。……と書きながら実は過去に一度集団創作と一人の書き手による創作二本立ての上演がなされた記録があります。この時の作品テーマは「自分たちの住む町」、筆者の勝手な理解ですが町を素材とした「現実」に依拠した作品と、宮沢賢治作品がベースとは言えフィクションとして成立させた戯曲との違いがあり、「難物への挑戦」の意味合いとしては必ずしも誤った紹介ではないと考えています（「勝手な」理解である事は否めませんが）。

さて宮沢賢治です。土台となる作品を提示して丸尾

聡氏に執筆を依頼、その不思議な童話世界が（原作に沿った「紹介劇」でなく）新たな劇として立ち上がる作品となりました。新作ですから舞台において評価を頂くしかありませんが、テキストが持つメッセージ性のラインを辿りながら、舞台に立つ役者たちがそれぞれの役割として如何に躍動的に、演劇的に、深く、楽しく存在できるか、お客とともに芝居という時間を歩むことができるか……今回初めて招いた演出・大西弘記（劇団 TOKYO ハンバーグ）氏のリードで舞台作りが進んでいます。

20 代、大西氏は伊藤正次演劇研究所に入所。5 年間、厳しい指導を受けながら「演劇は世直し」という伊藤氏の考えに影響を受けます（伊藤正次氏は、東京演劇アンサンブル出身。研究所では、ブレヒト作品を中心に指導を受けたそう）。2006 年に自らの作品を上演するため TOKYO ハンバーグを設立。これまで、原発問題をテーマにした作品も多数上演。今年は、詩人・竹内浩三を描いた、青年劇場『きみはいくさに征ったけれど』の脚本に続いて、芦浜原発建設を阻止した漁港の闘いを描いた『夜明け前、私たちは立ち上がる』で、企画、演出。人間を描くことで真実、社会の矛盾を浮かび上がらせる手法は秀逸。伊勢出身。伊勢への郷土愛に溢れている。40 歳、溝の口在住ということで、これからの川崎の演劇シーンでは欠かせない存在になるでしょう。

7 月 14 日（土）・15 日（日）、11 時 / 15 時開演、多摩市民館ホールでぜひ見届けて下さい。心よりお待ちしております。

訃報

京浜協同劇団の創立メンバーで、元運営委員の細田寿郎さんが、去る 6 月 11 日、食道癌のため逝去されました。85 歳でした。通夜は 15 日、葬儀は 16 日に行われ、多くの方がお見送りをしました。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

「文化の仲間」会報では、81 号で、劇団員による劇団員紹介のトップバッターとして登場されたばかりでした。細田さんのことにつきましては、次号（83 号）でお伝えいたします。

◎文化の仲間通信◎

◆映画「ゲッベルスと私」

会場 岩波ホール

日程 6月16日(土)～8月3日(金) 上演時間は下記

平日 11:00 13:30 16:00 19:00

土・日・祝祭日 11:00 13:30 16:00 18:30

入場料 当日料金 一般1800円/学生・シニア1500円

小・中・高校生1200円 障害者1400円

前売券 一般1500円(ローソン・7月27日まで)

終戦から69年の沈黙を破り、ゲッベルスの秘書ボムゼルが独白する。30時間に及ぶ独白のインタビューは、20世紀最大の戦争と全体主義の下で抑圧された人々の人生を浮き彫りにする。

問合せ 岩波ホール 03-3262-5252

HP: <http://www.iwanami-hall.com/>

◆青年劇場 小劇場企画 No.23 宣伝

日程 7月6日(金)～17日(火)

開演時刻は問い合わせてください

会場 青年劇場スタジオ結(YUI)

作 高田保/演出 大谷賢治郎/出演 上甲まち子・葛

西和雄・島本真治・大山秋ほか

料金 日時指定・自由席

一般 [前売] 4500円 [当日] 4800円

U30(30歳以下) [前売] 3000円 [当日] 3300円

中高生シート 1000円(前売のみ)

陸軍省主催のラジオドラマに感激ひとしおの市井の人々。好評に気を良くした陸軍大佐の後押しでドラマが舞台化されることになり、作家は戦地で盲目になったもと兵士を訪ねるが……。

問合せ・申込み 青年劇場 03-3352-6922

ticket@seinengekijo.co.jp

HP: <http://www.seinengekijo.co.jp/>

◆第36回 みんなでつくった平和公園

みんなでつくるコンサート 2018

日程 7月16日(月・祝) 16:30開場 17:00開演

会場 川崎市中原平和公園野外音楽堂

参加費 無料(賛同金800円) 全席自由

出演 まあ～どれ・さいわい/サークル紫陽花/国鉄横

浜うたう会/法政第二中高校/合唱団いちばん星/神

奈川合唱団/ハンドベルねぎぼうず/松平晃・宮里隆

太郎/日吉エイサー隊/川崎太鼓仲間響 ほか

問合せ 平和公園コンサート実行委員会

松平 044-411-6402 柳沢 044-422-5638

◆幸区文化協会 夏休み体験教室(腹話術)

日程 7月21日(土) 13:30～15:30

会場 幸市民館 第2会議室

参加費 無料

内容 親子を対象に、しろたにまもる講師がやさしく腹話術を教えます。

◆第49回 ヨコスカ平和美術展

日程 7月26日(木)～30日(月) 10:00～19:00

会場 横須賀文化会館3階(第1ギャラリー・第2ギャラリー)

入場料 無料

軍事力ではなく対話を!——ヨコスカ平和美術展は1970年以来、基地の町横須賀で平和を訴え続けてきました。油彩、水彩、日本画、版画、立体、工芸など多彩な出品があります。

問合せ 実行委員会 046-865-4788(倉田るみ)

HP: <http://www.ypea.info/>

◆川崎市民劇場 NLT プロデュース しあわせの雨傘

日程・会場 8月4日(土) 15:30 幸市民館

8月16日(木)18:15・17日(金)13:30 エポックなかはら

8月18日(土)15:30 多摩市民館

作 バリエ&グレディ/演出 鶴山仁/出演 賀来千香

子・井上純一・永島敏行ほか

周囲からお飾りと思われていた妻が、夫の急場を救っ

たことで自分の才能に気づき、変化していく姿を描いたコメディ。

問合せ・申込み 川崎さいわい市民劇場 044-244-7481

川崎市民劇場なかはら 044-455-7950

たま・あさお市民劇場 044-911-6920

◆劇団民藝公演 黒い雨一八月六日広島にて、矢須子一

日程・会場 7月31日(火) 新宿・紀伊國屋ホール

8月2日(木) 池袋・東京芸術劇場シアターウエスト

各14:00開演

原作 井伏鱒二「黒い雨」より/上演台本 笹部博司/

演出 丹野郁弓/出演(語り) 奈良岡朋子

入場料 一般4000円 U25(25歳以下)2000円

ささやかな生活を送っている閑間重松・シゲ子夫妻と姪の矢須子の物語。矢須子をなんとか嫁がせようとする夫婦ですが、次第に悲しい事実が明らかになります。

問合せ・申込み 劇団民藝 044-987-7711 [月～土 10:00～18:00]

HP: <http://www.gekidanmingei.co.jp/>

◆劇団銅鑼ドラマファクトリー vol.11 ひめち

日程 8月17日(金)～26日(日)

14:00または19:00開演(詳細問合せ)

会場 銅鑼アトリエ(板橋区中台1-1-4)

作 川口圭子/演出 山田昭一/出演 山田昭一・馬淵

真希・宮崎愛美・設田太郎ほか

料金 一般 4500円 30歳以下3600円

遍路道沿いにあるこじんまりとした旅館白浜荘。一見穏やかな海辺の村。しかし不漁に悩み、漁業は停滞。そこへ建設業者が出入りし高速道路建設に向けて蜜柑山が買収され始め店…。

問合せ・申込み 劇団銅鑼 03-3937-1101

info@gekidandora.com

HP: <http://www.gekidandora.com/>

◆第20回 響け!みやまえ太鼓ミーティング

日程 8月25日(土) 13:50開演

会場 川崎市宮前市民館ホール・市民広場

参加費 無料 自由席 当日直接会場へ

ゲスト 荒馬座

区内を中心に活動している様々な和太鼓グループが演奏を拾います。文化協会の協力で着物・浴衣の着付けサポートがあります。弘前ねぶたをもとに区内の職人さんと中学生によって作られた宮前ねぶたも披露されます。

問合せ 宮前区役所地域振興課 044-856-3125

■文化の仲間ギャラリー■

大谷 敏行◎

「厳選」大谷敏行の川柳塾

オスプレイ 解体ショーでもあるまいに 三月四日 赤旗日曜版掲載

自民党「土俵降りて」と天の声 四月二九日/五月六日 赤旗日曜版合併号掲載

シンゾーよ ゴルフだったら負けてやる 五月一三日 赤旗日曜版掲載

「父帰る」帰ってみれば空き家かな 六月一三日 日本海新聞掲載

皮肉にも 九条俳句知れ渡る 六月一七日 赤旗日曜版掲載

六月一七日 赤旗日曜版掲載